「祖母の幸せおにぎり」

壱岐市立勝本中学校　三年　野元理彩

「おばあちゃん。おにぎり作って、って言いました。」

小さい頃私はご飯を食べる時は決まって祖母にそうお願いするのであった。自ごはんまりいつもお願いしていたものだった。

そんな私のわがままを、いつもこころこころいながら聞き入れ、塩を多めにいれておいしくつくってくれた。

私も嬉しく食べるかな？

壱岐市の伝統のおにぎりは、米作りであった。

私が住んでいるのは、米作りが盛んな長崎の壱岐の島である。

私が成長できた事でもある。

祖母が作ってくれた。

私が成長してきた事と、たくさん作ってくれた。

私も嬉しくてニ人の姉と何個も食べていた。

私たちは、家でも、祖母、両親を中心に作っている。

壱岐島産のお米を我が家の伝統のおにぎりは我が家のお米が、この壱岐島産のお米である。

そんな壱岐の島である。

私が成長できた事で、長崎の壱岐島産のお米を使ってい

20×20

しかし、そんな壱岐の島も米作りにおいて危機的な状況にあるということを、米作りをしている私の祖父が

「壱岐の島は、人口も減少しており、米作りを引き継ぐ若い後継者が少ない。米作りをしている人のほとんどが高齢者で、このままでは、壱岐島産のお米はなくなってしまうのではないか」。

というのである。私は、この壱岐島産のお米がなくなることは考えられないし、受け継いで守っていかなければならないと考える。では、後世に引き継ぎ守っていくためには一体私たちに何ができるのか真剣に考えた。若い人は壱岐にはいるもののなかなか、米作りをする人は増えない。しかし、お米を食べる人は島にはたくさんいる。田んぼもたくさんあるが最近では使われなくなった田んぼも見られる。私は、自分ができることを中心に二つの提案をする。

一つ目は後継者を増やすということである。

壱岐の島は、若い人も減少しており、その中で後継者を探すのは難しい一面もある。なので、島以外の人でも壱岐の米作りを受け継いでくれる人を探す事が大切だ。

二つ目は、壱岐島産の米の魅力を発信して、いくことである。様々な産の米の魅力を発信して、くさんの人に壱岐島産のお米を作ってもらいたい。

私におにぎりを作ってくれた祖母は、日に日に弱くなり、今度は私がおにぎりを食べさせていた。祖母に食べさせると味わって、

「おいしいね。なつかしい味がするねぇ。」

と言った。私にとって嬉しい言葉であった。

しかし、今年の夏、今から新米ができる時期に悲しいことがあった。私におにぎりを作ってくれた祖母が天国に旅立ったのである。突然の出来事に家族みんなで泣いた。

母のおにぎりが食べられないと思うと悲しけれど祖母を食べる度に祖母のことを思い出す。もうおにぎりを食べ

が倍増し、涙が溢れてくる。そんな悲しむ私たち姉妹を思い、本当は一番悲しいはずの祖父がおにぎりを作ってくれた。形が不格好で、味は少し違っていたが、祖母や祖父の思いが詰まった愛情いっぱい、幸せいっぱいのおにぎりだ。ある時、一番下の妹が食べていてふと「あー。おいしい。おばあちゃん思い出して幸せになるし。」と笑顔いっぱいにいったので、それから我が家では、「おばあちゃんの幸せおにぎり」と名付けた。名前が付いた我が家の新しい伝統おにぎりだ。そして今、毎朝行っていることがある。それは、妹たちと一緒におにぎりを作り、祖母のお仏壇へお供えすることである。

「おばあちゃん持ってきたよ。おばあちゃんの幸せのおにぎり！いっぱい食べてね。」と言ってお供えをする。祖母もきっと喜んでいると思う。同時に喜界島産のお米を引き継ぎ守っていくこともお仏壇の前で誓っている。明日もまた、祖母へ幸せおにぎりをつくろう。

20×20